

Sermon illustrations 26~40: Index of titles and themes

No	Theme	Title
26	Sacrifice	稲むらの火
27	New life out of suffering	ティーポット: The teapot from Hans Christian Anderson's fairy tales
28	Prayer	Thomas a Kempis' Morning Prayer
29	The tongue (Proverbs 12:18, James 3:6-8)	いやす舌、さす舌 Jewish legend
30	Christmas, sacrifice	『ミシュカ』 The teddy bear who gave himself as a Christmas present
31	Suffering, worship	Mizuno Genzo – his life and poetry
32	Various	Mizuno Genzo – 9 more poems
33	Christmas	Mizuno Genzo – the birth of the Saviour
34	Christmas, true wisdom, sacrificial giving	The Gift of the Magi by O Henry. (Japanese version, comment in Japanese, English text)
35	Value of a human being	“Only one” – the testimony of tenor singer, Aragaki Tsutomu (新垣勉)
36	The Cross, Man's sin	Salvation Army Founder, William Booth's dream
37	Forgiveness	デシェーザーと淵田光男 (World War 2 American Pilot's story)
38	Purpose of life, life as a journey	人生は片道切符 (includes quotes from Matsuo Basho, Tokugawa Ieyasu and Yoshikawa Eiji)
39	Life, expectation	期待といのち
40	Cross, suffering, comfort	A light on the cross- the story of Seika 329

Illustration 26: 物語『稲むらの火』

“Inamura no Hi” is a story first made famous in Japan and overseas by Lafcadio Hearn(1850-1904). But the tale in the form in which it appears below was written by Nakai Tsunezo and published in Kokugo elementary school textbooks from 1937 to 1949. As such it was read by every child in the country.

This text was taken from <http://www.bo-sai.co.jp/inamuranohi.htm> but it can be found on a number of other Japanese websites.

稲むらの火

「これはただ事ではない」とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別に烈しいというほどのものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことの無い不気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下ろした。村では豊年を祝う宵祭りの支度に心を取られて、さっきの地震には一向に気が付かないものようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこに吸いつけられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、みるみる海岸には、広い砂原や黒い岩底が現れてきた。

「大変だ。津波がやってくるに違いない」と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろとも一のみにやられてしまう。もう一刻も猶予はできない。

「よし」と叫んで、家に駆け込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び出してきた。そこには取り入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んであった。

「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ」と、五兵衛は、いきなりその稲むらのひとつに火を移した。風にあおられて、火の手がぱっと上がった。一つ又一个つ、五兵衛は夢中で走った。

こうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突っ立ったまま、沖の方を眺

めていた。日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなってきた。稲むらの火は天をこがした。

山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。「火事だ。庄屋さんの家だ」と、村の若い者は、急いで山手へ駆け出した。続いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追うように駆け出した。

高台から見下ろしている五兵衛の目には、それが蟻の歩みのように、もどかしく思われた。やっと二十人程の若者が、かけ上がってきた。彼等は、すぐ火を消しにかかろうとする。五兵衛は大声で言った。

「うっちゃっておけ。大変だ。村中の人に来てもらうんだ」

村中の人、おいおい集まってきた。五兵衛は、後から後から上がってくる老幼男女を一人一人数えた。集まってきた人々は、もえている稲むらと五兵衛の顔とを、代わる代わる見比べた。その時、五兵衛は力いっばいの声で叫んだ。

「見ろ。やってきたぞ」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指差す方向を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は見る見る太くなった。広くなった。非常な速さで押し寄せてきた。

「津波だ」と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のように目の前に迫ったかと思うと、山がのしかかって来たような重さと、百雷の一時に落ちたようなとどろきとをもって、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後ろへ飛びのいた。雲のように山手へ突進してきた水煙の外は何物も見えなかった。人々は、自分などの村の上を荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。高台では、しばらく何の話し声もなかった。一同は波にめぐりとられてあとかたもなくなった村を、ただあきれて見下ろしていた。稲むらの火は、風にあおられて又もえ上がり、夕やみに包まれたあたりを明るくした。

はじめて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつく

と、無言のまま五兵衛の前にひざまづいてしまった。

Editor's note: It seems that the story above and the actual facts are slightly different so for those interested, here is an explanation adapted from <http://www.bo-sai.co.jp/hamagutigoryou.htm>

物語『稲むらの火』と 実話 — 物語の五兵衛と実話の儀兵衛（梧陵） —

『稲むらの火』の物語で、主人公 五兵衛のモデルとなった浜口儀兵衛（梧陵）は、1820年、^{ひろむら} 広村（現在 ^{わかやまけん} 和歌山県 ^{ひろかわちょう} 広川町）に生まれ、三十四歳ごろに浜口家（ヤマサ ^{しょうゆ} 醤油）を相続した。（後年、梧陵と名を変えた）

物語『稲むらの火』の元となった二つの地震が起こったのは、1854年である。最初の地震は12月23日午前10時ごろ、地震の大きさはマグニチュード8.4 ぐらいの巨大地震で、大きな被害を出した。二度目の地震もマグニチュード8.4 ぐらいの巨大地震で、すさまじい被害を出した。

広村では、最初の地震があった12月23日の10時ごろ、強い揺れで、儀兵衛はすぐに海岸に出て異常な波を見た。津波が来るのを感じた儀兵衛は、村人に言って家財を高台へ運ばせ、老人、幼児、病人を避難させた。

翌日12月24日、海面が平常に戻ったので、村人は家に戻ったが、その日の午後4時ころ、再び大きな地震が起こり、瓦が落ち、家の柱や壁や塀が崩れた。

儀兵衛が村を見回ると、海面が急に山のように盛り上がり、押し寄せて来た。高さ5mの波はさらに高くなった。村人たちの中で、儀兵衛は元気な者たちといっしょに逃げ遅れた人を助け、自分も走って逃げようとしているうち、津波に巻き込まれてしまうが、かろうじて丘のひとつにたどり着いた。高波は、大木や大石を流して村を破壊し、行方のわからぬ村人が大勢出た。すでに夜になっていたが、儀兵衛は元気な人たちに松明を持たせて村に戻った。しかし、津波が何度もくるので、高台へ逃げることにした。その途中、村人が方向を見失わないようにと、稲むらに次々と火をつけながら高台に戻った。しかし、高波は稲むらの火まで消してしまった。

実話で広村を襲った津波の状況はこのようなものだった。物語『稲むらの火』では、五兵衛が、津波に気づかない村人を集めるために稲むらに火をつけたと書いている。しかし、実話では、津波から逃げる村人に道を教える目印にしたのである。

津波が収まった後、儀兵衛は村人の救援をする。まず、おにぎりを配った。それから、道路や橋の修理などを指揮するとともに献身的な活動を続けた。

村の堤防は、3年10ヶ月かかった。この堤防のお陰でその後の津波でも広村は被害を免れている。

後に、儀兵衛は梧陵と名乗り、明治時代、新政府の郵政大臣まで出世をする。晩年は故郷に戻り、和歌山県 初代 県会議長などを務めた。

人々は悟陵を「生神様」と敬った。小泉八雲(ラフカディオ・ハーン (1850～1904) (Lafcadio Hearn))はそこから『仏の畠の落穂 (Gleanings in Buddha-Fields)』という物語を書き、「A Live God(生ける神)」の章で、五兵衛の活躍を書いた。その40年後(1937)、中井常蔵は、小学国語読本に『稲むらの火』を書いた。

実話の「儀兵衛(悟陵)」は、物語の中の「生ける神」や「五兵衛」とは少し異なり、高潔な魂と、すばらしい人間愛、すぐれた頭脳を持ったリーダーであった。

Illustration 27: 『ティーポット』 – アンデルセン童話より

アンデルセンは、生涯に 150 以上の童話を書きました。デンマークの家庭には、必ずといっていいほどアンデルセン童話集が置かれており、プレゼントとしても良く用いられるそうです。でも子供たちに良く知られている童話は、10 作ぐらいです。もっとアンデルセンの名作を読んでもらおうと、デンマークの文芸評論家が 2000 年に、子供たちにあまり知られていない名作 20 数作を編集し、最近、日本語でも出されました。その中にある「ティーポット」というお話を紹介します。

『ティーポット』

ある屋敷に誇り高いティーポットがいました。高価な磁器で、長い注ぎ口や幅広の持ち手が自慢でした。ただ一つ、このポットには小さなヒビが蓋の部分に入っていて、カップやミルク入れや砂糖つぼからは、そのヒビについて悪口を言われていました。

でも、ティーポットはいつも食卓の主役なので、そんなことには平気でした。カップや砂糖つぼにはない注ぎ口が自分にはある。また、ミルク入れにはない蓋が自分にはある。自分がいるからこそ、おいしいお茶が飲めるのだと自慢していました。

ところがある時、主人がこのティーポットをすべり落として、大切な注ぎ口を割ってしまったのです。やがてこのティーポットは、屋敷の台所のゴミとなり、そこへやって来た貧

しい女の人に引き取られました。

ティーポットは誇りも砕け散り、こんな事は乗り越えられないと思うほどつらい気持ちでした。

ところが、ティーポットが自分の人生にすっかり絶望していた時、お腹の中に土を入れられ、球根が一つ植えられたのです。

やがて、ティーポットの中で球根が芽を出し、美しい花が咲き、見とれるほどでした。その花がティーポットに感謝することなど少しもなかったけれど、それでもティーポットは幸せでした。

ティーポットは、自分の人生を振り返って、こう思いました。「つらく、絶望したあの日から、少しずつ新しい人生が始まった。」と。

私たちは、自分に与えられ、変えることのできない つらい状況の中でも、何か良いことを見つけるなら、新しく生きる喜びを持てると思いました。

(松元潤牧師の説教より)

Illustration 28: トマス・ア・ケンピスの祈り

一日のはじめに

一日が何をもたらすか

いったい誰がわかりましょう

ですから神さま

一日一日を

この世における最後の日であるかのように

生きることができますように

どの日も、この世の最後の日

と ならないとも限らないのだということを

私は知っています

Illustration 29: いやす舌、さす舌

軽率に話して、人を剣で刺すような者がいる。

しかし、知恵のある人の舌は、人をいやす。

(箴言^{しんげん} 12・18 ヤコブ 3 : 6-8)

ユダヤの小話にこんな話があります。

主人がしもべに、世の中で一番おいしく上等なものを買ってくるようにと言いました。しもべは肉屋から牛の舌を買ってきました。とてもやわらかくておいしい舌でした。主人はなるほどと感心し、今度はこう命じました。世の中で一番まずく下等なものを買っておいでと、するとしもべはまたしても牛の舌を買ってきました。

主人は不審に思って、なぜおまえは、一番良い物と言っても牛の舌を買い、また一番悪い物と言っても同じ牛の舌を買ってきたのかと問い詰めました。

すると彼は「世の中に良ければ舌ほど良いものはなく、また悪ければ舌ほど悪いものはありません」（「ユダヤ5千年の歴史」より）と答えました。

なるほどその舌はとても堅くて食べられませんでした。

「イエスの涙 恵みの^{れいそう}霊想5」 p. 8 よしもちあきら^{ちよ} 吉持章 著 いのちのことば社

Illustration 30: 『ミシュカ』 ―クリスマスのお話―

『ミシュカ』は、フランスで作られた絵本（マリー・コルモン作，セーラー出版）です。主人公のミシュカは，熊のぬいぐるみです。

ミシュカを自分のおもちゃの一つとして持っていたエリザベツトは，いばり屋で，25以上ものおもちゃがいつも傍になれば怒り出してしまふような，そんなわがままな女の子でした。かんしゃを起こすと人形やぬいぐるみをクシャクシャにしたり，部屋の隅に投げつけたりします。

ミシュカは，一度もこの女の子から大切にしてもらふことがありませんでした。

そこで，ミシュカは，この女の子の家から逃げ出して森の中で暮らすようになります。自由になったミシュカは，初めは森の中でいろいろと楽しく過ごします。

けれども、「クリスマスは、お友だちの手助けをしたり，悲しんでいる人たちを慰めたり，間違いをなおしたり，何か自分にできるいいことをする日だ」と知らされて，「ぼくにできることは何かな?」と考えるようになります。

そんな時，クリスマスプレゼントをたくさん積んだソリを引くトナカイと出会ったミシュカは，村から村へ，家から家へとクリスマスプレゼントを配るお手伝いをします。

それはとても楽しかったのですが、ミシュカはやはり考えます。「なんか善いことするって、これだけでいいのかな?」、「もっと、なんかあるんじゃないのかな?」と。

その内に、とうとう一番最後の家にきました。森の外れの貧しい家です。ミシュカは大きな袋の中を探しましたが、大変なことにプレゼントは何も残っていません。この小さな家には病気の男の子がベッドに横たわっていました。この子もプレゼントを楽しみに待っています。「どうしよう。この子が明日の朝、用意してある長靴下の中に何も入ってなかったらどんなに悲しいだろう?」ミシュカは考え込んでしまいました。

そして、とうとう、ミシュカは、クリスマスに自分がその男の子のためにできるただ一つのことを思いつきます。今まで、森の中を自由に思い通りに歩き回ったのは素敵なことでした。いろいろな子供たちのためにトナカイの手伝いをしてプレゼントを配ったことも嬉しいことでした。

でも、自分だけができること、自分にしかできないことを、今、ミシュカは見つけて決心しました。それは、ミシュカ自身が、その男の子の用意した長靴下の中に入って、朝を待つことでした。

(松元潤牧師の説教より)

みずのげんぞう

Illustration 31: 水野源三 — 生涯と詩

水野源三は、^{ながのけん はにしなぐん さかきまち}長野県 埴科郡 坂城町で、1937年に生まれ、1984年、47才で天に召されました。9才のとき、赤痢の高熱で全身マヒの体になり、言葉を話すことも出来なくなりました。

12才のとき、初めて聖書に触れ、13才で洗礼を受けクリスチャンになりました。母の手助けで、五十音図を瞬きで指定する方法で、多くの詩を作りました。意思表示の手段は瞬きをすることだけだったことから「まばたきの詩人」と呼ばれました。

水野源三の信仰と、すなおで感謝と喜びに満ちた詩と、障害のゆえの苦痛と戦って勝利した人生の姿とは、今、日本全国に、さらに、国際的にも感動の輪を広げつつあります。

日本キリスト教団 ^{えいこう}坂城栄光教会内には、水野源三記念コーナーがあります。坂城町^{たまち}田町に詩碑が建てられています。

今日一日も

新聞のにおいに朝を感じ

冷たい水のうまさに夏を感じ

風鈴の音の涼しさに夕ぐれを感じ

かえるの声はっきりして夜を感じ

今日一日も終りぬ

一つの事一つの事に

神さまの恵と

愛を感じて

水野源三詩碑（長野県坂城町）

『生きる』

神さまの 大きな御手の中で
かたつむりは
かたつむりらしく歩み
ほたるぐさ
螢草は 螢草らしく咲き
雨蛙は 雨蛙らしく鳴き
神さまの 大きな御手の中で
私は 私らしく 生きる

Living

*In the great hand of God
the snail
crawls as the snail should
the spider wort
blooms as the spider wort should
the green tree frog
croaks as the green tree frog should
And in the great hand of God
I
live as I should*

悲しみよ

悲しみよ悲しみよ

本当にありがとう

お前が来なかったら

つよくなかったなら

私は今どうなったか

悲しみよ悲しみよ

お前が私を

この世にはない大きな喜びが

かわらない平安がある

主イエス様のみもとに

つれて来てくれたのだ

Sorrow

O Sorrow!

Thank you so much,

O Sorrow!

Had you not come to me,

had you not been so strong,

I wonder how I would be today.

O sorrow!

You took me to the side of Jesus my Lord,

where there are joys not of this world,

where there is peace not to be taken away,

O Sorrow!

Illustration 32: 『水野源三』 —More Poems

御言葉

神様、今日も御言葉を下さい

一つだけで結構です

私の心は小さいですから

沢山いただいても溢れてしまい

もったいないので

はっきりと分かりました

焚火の温かさは 焚火に手をかざした

その時に はっきりと分かりました

焼きいものうまさは 焼きいもを食べた

その時に はっきりと分かりました

キリストの愛は キリストを信じた

その時に はっきりと分かりました

黙ろうよ

朝霧に包まれて草も木も黙っている
自分勝手なおしゃべりをやめて黙ろうよ
そうすれば主の御声が聞こえてくる

ありがとう

物が言えない私は
ありがとうのかわりにほほえむ
朝から何回もほほえむ
苦しいときも 悲しいときも
心から ほほえむ

それなのに

誰も誰も美しい花を愛し親しみ楽しむ

庭にたくさんの花の種をまき

鉢に色とりどりの花を咲かせ

床の間に形よく花をいけ

机の上に花を美しくかざり

高原に咲き乱れる花を見に行き

山奥にかおる花を捜しに行き

それなのになぜ

ほんとの心を求めないのか

美しい愛の心を

それなのになぜ語る

ひとの心を傷つける言葉を

ひまわり

庭から切ってきた 大きな大きな

ひまわりの花が 小さな小さな事に

こだわるわが心に 話しかける

神さまの大きな大きな愛を

目には見えない

心に迷いのある時には
私たちの目には見えない
私たちを導きたもう
恵み深き主の御手を覚えよ

心が飢え渴く時には
私たちの目には見えない
私たちを養いたもう
恵み深き主の御手を覚えよ

心まで疲れた時には
私たちの目には見えない
私たちをいたわりたもう
恵み深き主の御手を覚えよ

包む

雪がとけた 窓ぎわの
イヌフグリの花を春の光が優しく包む

枯木のような 私のからだを
キリストの愛が キリストの愛が
温かく包む

御心のままに

この道行きたいと願っても
御心でなければ行かれない
御心を成したもう御神よ
御心のままに行かせたまえ
試練を避けたいと願っても
御心でなければ避けられない
御心を成したもう御神よ
御心のままに助けたまえ
どんなに生きたいと願っても
御心でなければ生きられない
御心を成したもう御神よ
御心のままに生かしたまえ

Illustration 33: 『水野源三』－救いの御子の降誕を

『 救いの御子の降誕を・・・ 』

一度も高らかに
クリスマスを楽しむ
賛美歌を歌ったことがない
一度も声を出して
クリスマスを祝う
あいさつをしたことがない
一度もカードに
メリークリスマスと
書いたことがない

だけどだけど
雪と風がたたく部屋で
心の中で歌い
自分自身にあいさつをし
まぶたのうらに書き
救いの御子の降誕を
御神に感謝し喜び祝う

Illustration 34:

賢者の贈り物 (The gift of the Magi) by O・ヘンリー

The following Japanese translation of O Henry's "The gift of the Magi" with the introductory comments is from the website at <http://www.netwave.or.jp/~wbox/dokenjan.htm> But other versions can be found at other sites.

At <http://www.so-net.ne.jp/storygate/story/keniya/digest.html> you can read as you listen to a brief interpretation of Della's part of the story.

クリスマスのプレゼントを贈りあった若い夫妻は、どちらも役に立たないものを贈ってしまった。それは、なぜだったのだろうか。キリストが誕生したときに、東方からきた賢者達は、こんな間違いはしなかっただろうが・・・しあわせが「富」にあるのではないことがわかる物語。

賢者の贈り物 (The gift of the Magi) by O・ヘンリー

ある都会の片隅に、ジェイムズ・デリングラム・ヤングという若い夫妻が住んでいました。彼らの生活は貧しかったけれど、愛情にあふれていました。

さて、明日はクリスマスです。ここ数日間、妻のデラは愛する夫のために何を買おうかと考えていました。何か立派で珍しくて値打ちのある物、夫のジムが持って誇りに思える物・・・。しかし、彼女には、ジムのプレゼントを買うためのお金がたった1ドル87セントしかありませんでした。

ところで、デラにはきらきら輝く美しい髪がありました。彼女はそれを売ってお金を作ることにしたのです。髪は20ドルで売ることができました。彼女は店から店をまわってジムへの贈り物を見て歩きました。そして、ついに見つけたのです。それはプラチナでできたとても品の良い時計の鎖でした。

ジムは祖父の代から受け継いだ立派な金時計を持っていましたが、それにつける鎖がなかったので、いつもこっそりと時計をみていたのです。あの時計にこの鎖をつければ、ジムは誰の前でも気がねなしに時間を見られるだろう。彼女はその鎖を買くと、喜々として家に急ぎました。

家で鏡の前に立ってみると、短くなってしまった髪は、もうどうしようもなく、まるで学校の生徒みたいでした。「神様どうか、ジムに今でも私をきれいだと思

わせて下さい。」とお祈りをしました。

その夜、ジムが帰ってきました。彼はつかれて、ひどくまじめな顔をしていました。まだ22才なのに。ジムはドアのところで、茫然と立ち止まりました。そして、妻をじっとみつめていました。

「ジム、そんなふうに見るのはやめて。私、髪を切って売ったの。ね、かまわないでしょう？髪なんてすぐにまた伸びるわ。さあ、クリスマスおめでとう、といってちょうだい。私、あなたにすてきなプレゼントを買ったのよ。」

「髪を切っちゃった？」

「そう、髪を売っちゃったの。でも、髪が短くても、今でも私を好きでしょう？」

「髪なんかで、ぼくがきみを愛したり愛さなかったりすると思うかね。だけど、このプレゼントを開けてごらん。……」

ジムはポケットから、包みを取りだして、テーブルの上に置きました。それはデラへのプレゼントでした。デラはそれを開けてみました。そこには、彼女が以前からあこがれていた、ブロードウェイの店の飾り窓にあった、宝石をちりばめた髪飾りがありました。今、それが自分の物になったのです。けれど、その髪飾りをする長い髪はもうなかったのです。

デラはそれを胸にしっかりと抱きしめました。そして、涙であふれた目でほほえみながら、「ジム、私の髪は伸びるのが早いよ。」といいました。

それから、ジムへのプレゼントを持って行って、パッと手を開きました。

「これがあなたへのプレゼントよ、ジム。すてきでしょう？ わたし、これを探すために町中を歩き回ったのよ。これで、一日に百回でも時計が見たくなるわよ。さあ、あなたの時計を出してちょうだい。どんなにすてきか、見てみましょう。」

ジムはソファーにごろっと横になると、両手を頭の下にまわして、微笑しました。「デラ、もうクリスマスプレゼントはかたずけて、しばらくはしまっておこ

うよ。すぐに使うのはもったいないから。」

・・・「ぼくは君の髪飾りを買うお金を作るために時計を売っちゃったんだ。」

THE GIFT OF THE MAGI by O. Henry

One dollar and eighty-seven cents. That was all. And sixty cents of it was in pennies. Pennies saved one and two at a time by bulldozing the grocer and the vegetable man and the butcher until one's cheeks burned with the silent imputation of parsimony that such close dealing implied. Three times Della counted it. One dollar and eighty-seven cents. And the next day would be Christmas.

There was clearly nothing to do but flop down on the shabby little couch and howl. So Della did it. Which instigates the moral reflection that life is made up of sobs, sniffles, and smiles, with sniffles predominating.

While the mistress of the home is gradually subsiding from the first stage to the second, take a look at the home. A furnished flat at \$8 per week. It did not exactly beggar description, but it certainly had that word on the lookout for the mendicancy squad.

In the vestibule below was a letter-box into which no letter would go, and an electric button from which no mortal finger could coax a ring. Also appertaining thereunto was a card bearing the name "Mr. James Dillingham Young."

The "Dillingham" had been flung to the breeze during a former period of prosperity when its possessor was being paid \$30 per week. Now, when the income was shrunk to \$20, though, they were thinking seriously of contracting to a modest and unassuming D. But whenever Mr. James Dillingham Young came home and reached his flat above he was called "Jim" and greatly hugged by Mrs. James Dillingham Young, already introduced to you as Della. Which is all very good.

Della finished her cry and attended to her cheeks with the powder rag. She stood by the window and looked out dully at a gray cat walking a gray fence in a gray backyard. Tomorrow would be Christmas Day, and she had only \$1.87 with which to buy Jim a present. She had been saving every penny she could for months, with this result. Twenty dollars a week doesn't go far. Expenses had been greater than she had calculated. They always are. Only \$1.87 to buy a present for Jim. Her Jim. Many a happy hour she had spent planning for something nice for him. Something fine and rare and sterling--something just a little bit near to being worthy of the honor of being owned by Jim.

There was a pier-glass between the windows of the room. Perhaps you have seen a pier-glass in an \$8 flat. A very thin and very agile person may, by observing his reflection in a rapid sequence of longitudinal strips, obtain a fairly accurate conception of his looks. Della, being slender, had mastered the art.

Suddenly she whirled from the window and stood before the glass. her eyes were shining brilliantly, but her face had lost its color within twenty seconds. Rapidly she pulled down her hair and let it fall to its full length.

Now, there were two possessions of the James Dillingham Youngs in which they both took a mighty pride. One was Jim's gold watch that had been his father's and his grandfather's. The other was Della's hair. Had the queen of Sheba lived in the flat across the airshaft, Della would have let her hair hang out the window some day to dry just to depreciate Her Majesty's jewels and gifts. Had King Solomon been the janitor, with all his treasures piled up in the basement, Jim would have pulled out his watch every time he passed, just to see him pluck at his beard from envy.

So now Della's beautiful hair fell about her rippling and shining like a cascade of brown waters. It reached below her knee and made itself almost a garment for her. And then she did it up again nervously and quickly. Once she faltered for a minute and stood still while a tear or two splashed on the worn red carpet.

On went her old brown jacket; on went her old brown hat. With a whirl of skirts and with the brilliant sparkle still in her eyes, she fluttered out the door and down the stairs to the street.

Where she stopped the sign read: "Mne. Sofronie, Hair Goods of All Kinds." One flight up Della ran, and collected herself, panting. Madame, large, too white, chilly, hardly looked the "Sofronie."

"Will you buy my hair?" asked Della.

"I buy hair," said Madame. "Take yer hat off and let's have a sight at the looks of it."

Down rippled the brown cascade.

"Twenty dollars," said Madame, lifting the mass with a practised hand.

"Give it to me quick," said Della.

Oh, and the next two hours tripped by on rosy wings. Forget the hashed metaphor. She was ransacking the stores for Jim's present.

She found it at last. It surely had been made for Jim and no one else. There was no other like it in any of the stores, and she had turned all of them inside out. It was a platinum fob chain simple and chaste in design, properly proclaiming its value by substance alone and not by meretricious ornamentation--as all good things should do. It was even worthy of The Watch. As soon as she saw it she knew that it must be Jim's. It was like him. Quietness and value--the description applied to both. Twenty-one dollars they took from her for it, and she hurried home with the 87 cents. With that chain on his watch Jim might be properly anxious about the time in any company. Grand as the watch was, he sometimes looked at it on the sly on account of the old leather strap that he used in place of a chain.

When Della reached home her intoxication gave way a little to prudence and reason. She got out her curling irons and lighted the gas and went to work repairing the ravages made by generosity added to love. Which is always a tremendous task, dear friends--a mammoth task.

Within forty minutes her head was covered with tiny, close-lying curls that made her look wonderfully like a truant schoolboy. She looked at her reflection in the mirror long, carefully, and critically.

"If Jim doesn't kill me," she said to herself, "before he takes a second look at me, he'll say I look like a Coney Island chorus girl. But what could I do--oh! what could I do with a dollar and eighty-seven cents?"

At 7 o'clock the coffee was made and the frying-pan was on the back of the stove hot and ready to cook the chops.

Jim was never late. Della doubled the fob chain in her hand and sat on the corner of the table near the door that he always entered. Then she heard his step on the stair away down on the first flight, and she turned white for just a moment. She had a habit for saying little silent prayer about the simplest everyday things, and now she whispered: "Please God, make him think I am still pretty."

The door opened and Jim stepped in and closed it. He looked thin and very serious. Poor fellow, he was only twenty-two--and to be burdened with a family! He needed a new overcoat and he was without gloves.

Jim stopped inside the door, as immovable as a setter at the scent of quail. His eyes were fixed upon Della, and there was an expression in them that she could not read, and it terrified her. It was not anger, nor surprise, nor disapproval, nor horror, nor any of the sentiments that she had been prepared for. He simply stared at her fixedly with that peculiar expression on his face.

Della wriggled off the table and went for him.

"Jim, darling," she cried, "don't look at me that way. I had my hair cut off and sold because I couldn't have lived through Christmas without giving you a present. It'll grow out again--you won't mind, will you? I just had to do it. My hair grows awfully fast. Say `Merry Christmas!' Jim, and let's be happy. You don't know what a nice-- what a beautiful, nice gift I've got for you."

"You've cut off your hair?" asked Jim, laboriously, as if he had not arrived at that patent fact yet even after the hardest mental labor.

"Cut it off and sold it," said Della. "Don't you like me just as well, anyhow? I'm me without my hair, ain't I?"

Jim looked about the room curiously.

"You say your hair is gone?" he said, with an air almost of idiocy.

"You needn't look for it," said Della. "It's sold, I tell you--sold and gone, too. It's Christmas Eve, boy. Be good to me, for it went for you. Maybe the hairs of my head were numbered," she went on with sudden serious sweetness, "but nobody could ever count my love for you. Shall I put the chops on, Jim?"

Out of his trance Jim seemed quickly to wake. He enfolded his Della. For ten seconds let us regard with discreet scrutiny some inconsequential object in the other direction. Eight dollars a week or a million a year--what is the difference? A mathematician or a wit would give you the wrong answer. The magi brought valuable gifts, but that was not among them. This dark assertion will be illuminated later on.

Jim drew a package from his overcoat pocket and threw it upon the table.

"Don't make any mistake, Dell," he said, "about me. I don't think there's anything in the way of a haircut or a shave or a shampoo that could make me like my girl any less. But if you'll unwrap that package you may see why you had me going a while at first."

White fingers and nimble tore at the string and paper. And then an ecstatic scream of joy; and then, alas! a quick feminine change to hysterical tears and wails, necessitating the immediate employment of all the comforting powers of the lord of the flat.

For there lay The Combs--the set of combs, side and back, that Della had worshipped long in a Broadway window. Beautiful combs, pure tortoise shell, with jewelled rims--just the shade to wear in the beautiful vanished hair. They were expensive combs, she knew, and her heart had simply craved and yearned over them without the least hope of possession. And now, they were hers, but the tresses that should have adorned the coveted adornments were gone.

But she hugged them to her bosom, and at length she was able to look up with dim eyes and a smile and say: "My hair grows so fast, Jim!"

And then Della leaped up like a little singed cat and cried, "Oh, oh!"

Jim had not yet seen his beautiful present. She held it out to him eagerly upon her open palm. The dull precious metal seemed to flash with a reflection of her bright and ardent spirit.

"Isn't it a dandy, Jim? I hunted all over town to find it. You'll have to look at the time a hundred times a day now. Give me your watch. I want to see how it looks on it."

Instead of obeying, Jim tumbled down on the couch and put his hands under the back of his head and smiled.

"Dell," said he, "let's put our Christmas presents away and keep 'em a while. They're too nice to use just at present. I sold the watch to get the money to buy your combs. And now suppose you put the chops on."

The magi, as you know, were wise men--wonderfully wise men--who brought gifts to the Babe in the manger. They invented the art of giving Christmas presents. Being wise, their gifts were no doubt wise ones, possibly bearing the privilege of exchange in case of duplication. And here I have lamely related to you the uneventful chronicle of two foolish children in a flat who most unwisely sacrificed for each other the greatest treasures of their house. But in a last word to the wise of these days let it be said that of all who give gifts these two were the wisest. O all who give and receive gifts, such as they are wisest. Everywhere they are wisest. They are the magi.

Illustration 35:

オンリー・ワン あらがきつとむ テノール歌手・新垣勉さん

テノール歌手・新垣勉さんが、「ひとり一人がかげがえのないオンリー・ワンである」との体験をお話して下さいました。

沖縄でメキシコ系米軍兵士と沖縄女性との混血として生まれた彼は、生後間もなく助産婦のミスにより劇薬を点眼され失明しました。

帰国した父、再婚した母と相次いで両親を失った彼の人生は、闇と憎しみの世界を生きるようになりました。しかし、高校1年の時にキリストに出会い、クリスチャンとなり人生が変わりました。

その後、著名なボイス・トレーナーから「君のラテン的な明るい声を授けてくれた父に感謝しなくてはいけない。君の一番の宝はその声なんだからね」と言われ、マイナスとばかり思っていた自分の境遇が、かけがえのないオンリー・ワンだと知って、両親や助産婦を赦せるようになりました。

どんな人にも神の愛は注がれており、それぞれの人生は唯一無二の価値があります。それを目に見える形で知らされたのがイエス・キリストです。

(松元潤牧師の文書より)

Editor's note: The English expression 'Only one' was popularized in the Japanese language by J pop group SMAP (スマップ) in 2003 when their song 『世界に一つだけの花』 sold over 2 million copies with the famous line、『ナンバーワンにならなくてもいい もともと特別なオンリーワン』.

Illustration 36: 救世軍の創立者ウィリアム・ブースが見た夢

十字架の前にたたずんでいる自分、イエス様を助けたい、何とかしたいと思うが声がでない。

そこにみすぼらしい男がハシゴを持って現れ、十字架に登る。助けてくれるのかありがたいと思うと、その男はてっぺんまで登り、トンカチを持って釘を更に深く打ち付ける。

「何をするんだ、やめろ」と叫ぶブースに、気づいた男が、にやりと振り返ると、その男は自分の顔だった。

「こころのお散歩」より

Illustration 37: デシェーザーと淵田光男
—米軍パイロットと日本軍人の戦後の足跡—

第二次世界大戦のときに、一人のアメリカの空軍パイロットが名古屋を爆撃した後、霧の中で方向が分からなくなり、不時着し、捕虜としてつかまりました。日本の軍人から2年間ひどい扱いを受け、飢えと寒さと病気に苦しみました。昭和19年の5月に聖書をもらうことができたので、彼は夢中になって、寝る時間を削って、その聖書を読みました。何度も読み返し、大切な聖句を暗記しました。

1ヵ月後、彼はローマ人への手紙の10章9節のみ言葉「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で信じるなら救われる」を読んだときに、彼は主イエスを神として信じ受け入れました。彼はすぐにマタイの福音書5章44節の「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」という言葉を実践し始めました。

日本人に対する憎しみが不思議と消え、毎朝、彼は自分にひどい扱いをする兵隊たちに優しく挨拶をしました。彼らのために祈りました。すると彼に対する兵隊たちの態度も変わり、時々、彼にそっと食べ物などを差し入れるようになりました。

戦争が終わって、デシェーザーさんは宣教師になって日本に戻りました。そして自分が爆撃した名古屋に教会を建て、日本中に証をして回りました。

彼の証を聞いて一人の日本人がキリストを信じました。その人は淵田光男といって真珠湾攻撃を指揮した軍人でした。二人はのちに親しい友人となって、日本や世界にキリストによる赦しのメッセージを語り続けました。

Illustration 38: 人生は片道切符

「人生は旅である」と言ったのは松尾芭蕉まつお ばしょうです。

吉川英治よしかわえいじは、「人生は旅である。しかも、この旅は、片道切符の旅である。」と言いました。すなわち、生まれた時が人生という旅の始発駅であり、大往生をとげる時が人生の終着駅になる、ということです。片道切符の旅というのも、人生を見事に言い当てています。

「人生は、重き荷を負って遠き道を往くが如し」と言ったのは徳川家康とくがわけ やすしですが、人生、何のためにこう苦勞しなければならぬのか、なぜこうもつらいことばかりあるのか、と不可解になってしまうこともあります。

さて、お互いの人生の旅はいかがでしょう。ハッキリとした目的を持ち、ゴールに向かって歩みたいものです。片道切符ですから、確実にその目的を果たしたいものです。今、自分がどこに向かって生きているのか分かれば、現実の苦勞も、意義あるものになるのではないのでしょうか。

キリストは人々に向かって、言われました。「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1:15) また、キリストは、十字架につけられる前の夜、弟子たちに言われました。「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。…あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。」(ヨハネ 14:2)

「神の国は飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。…また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」(黙示録 7:16、17)

このように、私たちのゴールは、ハッキリしています。このゴールをめざして励んでまいりましょう。(世の光メッセージ集より)

Illustration 39: 期待といのち

詩画家の星野 富弘ほしの とみひろさんが、群馬県・富弘美術館ぐんまけん とみひろびじゅつかんに日野原 重明ひの はら しげあきさんを迎え、親しく語り合いました。ふたりにとって、人生のターニングポイントは何だったのか。人生を充実させる秘訣は何か。あたたかい励ましと希望を与えてくれます。語り合いの内容は『たった一度の人生だから』という本になっています。下記の引用は本文より。(日野原重明 星野富弘 著 (A5変 96頁 定価1,260円))

前向きに何かを期待する気持ちがあるなら、
心が健康だということです。
病んでいても、健康感をもつことが とても大切です。
(日野原)

いのちというのは、
自分だけのものじゃなくて、
だれかのために使えてこそ
ほんとうのいのちではないかと思いました。
(星野)

(From: www.wlpm.or.jp/forest/one_life/index.htm)

Editor's notes:

Tomihiro Hoshino was a 24-year-old gymnastics teacher when he injured his neck demonstrating a double somersault to his junior high school students. Since then he has been completely paralyzed from the neck down. 2 years after the accident he became a Christian in hospital. He paints by holding a brush in his mouth and has published a number of books. (From <http://metropolis.co.jp/biginjapanarchive349/347/biginjapaninc.htm>)

Shigeaki Hinohara

Well known Christian doctor, head of St Luke's International Hospital in Tokyo (聖路加国際病院-せいりかこくさいびょういん) . At the time of writing "Tatta ichido no jinsei dakara" he was 95 years old!

Illustration 40: A Light on the Cross – the story of Seika no 397

Adapted from: http://promises.cool.ne.jp/There's_a_light_on_the_cross.html

It was September 1st 1923. The ground of Meiji Gakuin in Tokyo was packed with survivors of the Great Tokyo earthquake in which 142,000 people lost their lives and countless more their homes and livelihood. As darkness fell mosquito nets and candles were distributed. Missionary J.V. Martin, by chance in Tokyo at the time, went to the aid of the survivors. As the candles were lit, the tiny flickering flames seemed to him to form the shape of a cross piercing the blackness of the night and people's despair. There and then he put pen to paper and composed 'There's a light on the cross' which was later translated into Japanese as Seika 397. The words continue to inspire many with courage and comfort in times of trial and testing. Only the first line of each of the 3 verses is different as the remaining 3 lines are repeated each time. So take a few minutes to understand this easy Japanese hymn. A simple English translation is below.

1.

とお
遠き国や海の果て、いずこに住む民も見よ
慰めもて変わらざる、主の十字架は輝けり
慰めもてなが汝がために 慰めもてわ我がために
揺れ動く地に立ちて なお十字架は輝けり

Look! You peoples who live in distant countries and over the seas
The unchanging Lord who brings comfort, His Cross is brightly shining
He brings comfort to you, He brings comfort to me
Standing on the swaying ground, still the cross is brightly shining

2.

水はあふれ火は燃えて 死は手ひろげ待つ間に
Water is overflowing, fires are burning. Death stretches out its hand and waits.

3.

仰ぎ見ればなど恐れん 憂いあらず罪も消ゆ
If you look up you will not be afraid. There is no grief, and sin disappears.

J.V.マーティンは自作の手書きの原稿をわたしながら次のように語った。とうきょうだいしんさい「東京大震災の
9月1日(1923年)の夜、多くの罹災者が明治学院めいじがくいんの運動場で夜をむかえました。
九死に一生を得た人々に蚊やとろうそくが支給されました。その夜、たまたま東京にいた
私は明治学院に見舞いに行ったところ、蚊やの中で点火されたろうそくの火が丁度、闇
の中の十字架に見えたのです。私はさっそくペンをとりこの詩を書きあげ、その後大阪に

帰ってこの曲をつけました」と。作者マーティンは^{おおさかしりつこうとうしょうぎょうがっこう}大阪市立高等商業学校(今の市立大学)の英語講師で大阪に在住していた。

Vocabulary

いずこ	where (どこ)
九死に一生を得る	to barely escape death
蚊や	mosquito nets
罹災者	sufferers, victims
輝けり	輝いている